

一 何しに來たぞ何をしに

向から人がやつて來る。出逢頭に聞いてみる「あなたは何處から來ましたか」。「へい、何處から來たか知りませぬ」と答へる。「それなら、何處へ行くのですか」。「サア何處へ行くのだから、一向存じませぬ」。「存じませんツて、一體何をしてゐるんです」。「何をしてゐるのだから、自分にもわかりませぬ」。「……………」。

恁んな問答が、實際にあつたら、どんなものでせう。阿呆とも馬鹿とも、申しやうが無いではありませんまいか。然るに焉んぞ知らん、お手許近く、こんな問答を平氣で繰返して居りはすまいか。私共、内に省みて自問自答する。「私は元來何處から來たのであらう、云何して此の世の中に生れて來たか」。いくら考へても解らない。「いづれは死ぬる、死んだら後は云何なるだらう」。矢張り解らない。「そんなら、私は何をしてゐるのだらう。生きてゐる。生きてゐるには違ないが、何のために生きて居るのだらう」薩張り解らない。いッかど、解つたやうな顔はしてゐても、更に解らない。眞に「生の從つて來る所と、死の趣き向ふ所とを知らず」而も「愚痴蒙昧にして自ら智慧ありとなす」。随分變なものではあるまいか。

これは、他の者の事ではない。私共自分自身の事である。自分自身の事でありながら、而もそれが、何處から此の世に來つて、何處へ行くのか、とんと計り知られぬ。固より此の肉身が、母の胎を出で、墓の塵に埋もれるものであると云ふことは知つて居る。けれども肉身は自分でない。自分は云何して此處に來て、又云何なるものやら、少しも解らぬ。過ぎた後も暗黒であり、向ふ前も暗黒である。それであて、いつ何時、向の暗黒に陥らねばならぬか知れぬ。暗黒は恐怖を産む。恐怖は戰慄を催す。偕困つたものだ。云何

したら可いであらう。人誰か、この人生の根本問題に逢着して、驚かぬものがあらう。

進んで他に聞くか、他に聞いても同様に解らぬ。退いて自ら考ふるか、自分では尙解らぬ。それなら、過ぎた人生の後や、來らぬ人生の前の穿鑿よりも、近く人生其の者は、云何かと考へてみる。生れぬ先は兎も角、死んだ後は兎も角、生れてから死ぬるまでの、五十年七十年の間、即ち産湯の盥から湯灌の盥へ移る、その間は云何であるかと考へてみる。

誰しも「生きてゐるか」と問はれたら「生きてゐる」と答へる。「何のため生きてゐるか」と追求すれば、誰しも一寸返辭に魔胡つく。「生れたから生きてゐるんだ」と云ふか。それなら、生れた序に生きてゐるのか。生れたのが主で、生きてゐるのは序か。それでは全く心天式生活で、生れたくはないが、後から突出されるから生れた、生れたから有るのだ。あんまり手頼ない話。